発達を見る眼をゆたかに、おおらかに

第10回 発達を支える〝第3の居場所〟

鳥取大学
寺川志奈子

てらかわ　しなこ／鳥取大学地域学部。研究テーマは「子どもの自我、自己、および社会性の発達と教育的支援」について。共著に『自閉症児・発達障害児の教育目標・教育評価1　子どもの「ねがい」と授業づくり』（クリエイツかもがわ）など

怒りを爆発させる1年生

学童保育（放課後児童クラブ）は、働きながら子育てをする親の支援の場であるとともに、小学生の放課後の遊びと生活の場です。子どもにとっては、家庭、学校とはちがう、もう一つの居場所です。光くんは小学校入学と同時に、いるか児童クラブ（以下「いるか」と略して呼びます）に通い始めました。いるかは1年生から6年生までの70名近くの子どもたちが毎日放課後にやってくる大規模集団の学童保育です。

光くんはいるかに通い始めて間もなく、指導員から遊んでいたおもちゃを「片付けよう」と何度も言われたことに腹を立てて、引き出し、おもちゃ箱、本棚などをことごとく倒すという大暴れの姿をみせました。また、子どもたちが宿題やおやつの時間になって静かになると大声で走り回る、そこらへんにあるものを投げる、指導員を叩くといった行為がたびたびみられました。その様子に周りの子どもたちも反応してクラブ全体が騒然とした雰囲気になってしまいます。

なぜ、光くんがこんなふうに荒れているのか、その理由がわからずに、指導員たちはどうかかわったらよいのか、試行錯誤の日々でした。指導員には、光くんが感じている〝怒り〟をあらゆる人や物に力のかぎりぶつけているように感じられたそうです。どうやったら光くんが楽しく遊び込むことができるのだろうか、また光くんだけでなく、どの子どもたちも主体的に遊べているかについて、毎日、指導員全員で話し合いを重ねていきました。

はじめての大きな異年齢集団が落ち着かないのかもしれないと考えて、指導員が光くんに付いて近くの公園や買い物、散歩に連れ出すようにしてみました。光くんは、否定的な言葉をかけることなしにまるごと受けとめてくれるA指導員に安心感を抱いている様子でした。光くんはA指導員と一緒の外では落ち着いているものの、いるかの集団に戻るとまた暴れだします。また、このやり方では光くんの遊びが孤立してしまって、子ども同士のかかわりが薄くなってはいけないとA指導員は思いました。さらには周りの1年生から「光くんだけずるい」というやきもちの声もあがります。そんな時には、指導員は〝みんなのことを大切に思っているよ〟という気持ちが届くように、「ずるい」といった子どもには、その日、別の指導員が手厚くかかわるようにされたそうです。いずれにせよ、光くんにどうかかわればよいのかわからずに、指導員たちは混迷を深めていきました。

〝怒り〟の理由

光くんが興味をもてることはないか、気の合う子どもはいないか、少しでもかかわりのきっかけをつかもうと指導員全員の視点で光くんを見つめ続けました。そうしているうちに少しずつですが、光くんのことがわかりはじめます。光くんは計算や文字やお話をつくって書くことなど、勉強が得意です。宿題もすぐに終わらせます。一方で、身体を動かすことに不器用さがみられます。ボール投げ、鬼ごっこ、縄跳び、自転車などは苦手です。ぎこちない走り方を他の子どもからからかわれることもありました。

光くんが〝怒り〟を激しい行動で示した時、本人にその理由を聞くのですが、自分の気持ちを言葉でうまく表現することができません。また、友だちが遊んでいる様子を遠巻きに見て、自分も仲間に入りたい気持ちはありながら、苦手なドッジボールや鬼ごっこなど、絶対に負けるとわかっているものはやろうとしません。友だちがみんな居なくなってから、A指導員とやってみるということもありました。

こんなふうに、光くんは自分に自信がなくて、格好悪い自分を見せたくないという思いが強いゆえに、周りの大人や子どもからの自分への否定的な言葉かけや劣等感を感じることがあった時に、自分の気持ちをうまく言葉で表現できないことから、その〝怒り〟を激しい行動で表してしまうのではないか、という仮説を指導員はもつに至りました。また、夏休み明けのちょうどこの頃、保護者さんからはじめて、光くんが年長児の時にアスペルガー症候群と診断されたことを伝えられます。指導員はそれまで保護者に光くんのいるかでの困った行動を伝えていませんでした。保護者は、お迎え時の光くんの様子からいるかの困り感を察していたかもしれませんが、それよりも、いるかが光くんにとって〝楽しく毎日行きたがる場所〟という認識をもっておられたようです。そうした指導員との信頼関係ができてきた頃に、光くんのいるかでの様子をお伝えしたところ、障害のことを話してくださいました。

ある日のこと、光くんがまた指導員を叩きながら激しく怒